

## BOOK REVIEW 1

## 恋う・癒す・究める 脳科学と芸術

小泉 英明 編著

工作舎 ISBN978-4-87502-414-9 2008年発行

評者：笥 康明（慶應義塾大学）

芸術とは何か。これは個々の芸術家にとって永遠の問いであると共に、科学者にとってもそれをきちんと説明することは未だ難しいテーマである。古来同一のものであったとされる科学と芸術が、それぞれの分野で別々に発展を遂げて久しい。今や両者のアプローチには大きな違いが生まれ、芸術を理解できない領域として立ち入らない（立ち入れない）とする科学者の意見もよく耳にする。しかし、近年になって科学と芸術の距離はまた少しずつ狭まってきており、その融合の重要性を叫ぶ声の高まりも感じる。例として、筆者の専門とするユーザインタフェースの領域では、科学技術が生み出したコンピュータをはじめとするツールの普及が、メディアアートなどの芸術領域に大きな影響を与え、新しい表現が次々と生まれているという現状がある。また同時に、芸術領域でのニーズが新たな技術シーズを生み出すという双方向の循環も生まれている。これを両者の発展のベクトルの一時的交差に留まらず、融合領域として今後継続して発

展していくような枠組みを作るためにも、相互に理解を深めていくことが重要なテーマであると言える。

タイトルの通り、本書「脳科学と芸術」は脳科学のアプローチから、科学と芸術の融合領域を取り扱うものである。科学を直接芸術と関連づけようとしても難しい。芸術もそれ自体すぐに科学と結びつくとは限らない。そこで本書で着眼した科学と芸術の共通項、それは「人間」である。これは、科学と芸術の間に介在する人間の存在を理解することが、両者を結びつけるきっかけになるということである。本書では二つのアプローチで、両者の関係に迫っている。一つは、科学により人間のメカニズムを理解することで芸術を理解しようというアプローチ

であり、もう一つは芸術の本質を捉えることが人間および科学の理解につながるというアプローチである。一般的に、直接的に捉えづらい対象の本質を捉える際に、それを取り巻く環境を理解してみるのは有効な手段である。脳科学の発展に伴い、外面だけではなく内面にまで踏み込んで人間を観察・理解できるようになったことが、人間が生み出す対象であり、また人間の感情を動かす対象である芸術を理解するきっかけとなっている。

本書は、「恋う - 芸術衝動の由来と発達 -」、「癒す - やわらかい脳と芸術的創造力 -」、「究める - 遊びから至高体験へ -」という3章で構成される。各章の中に脳科学者や心理学者、工学者からアーティスト、音楽家に至るまで多岐に渡る専門家が最先端の活動紹介を通して、それぞれの視点から人と芸術の関係について述べている。それぞれの論がユニークな着眼点と示唆に富む実に魅力的な内容でまとめられており単独でも読み応えがある上に、上記の章構成のもと各論を通して読んだ時

に、さらに複合的な観点から人間そして芸術の輪郭が見えてくる。そしてなにより本書を通して強く感じることは、著者も指摘している通り、芸術を知ろうとすること、人間を知ろうとすること、その活動自体が科学的要素と芸術的要素が共存・融合した行為であるということである。

科学無しには芸術は語れない、また芸術無しには科学の発展は無い。そんな両者の結びつきの強さを今一度確認させてくれた一冊だった。より多くの「芸術に興味のある科学者」、「科学に興味のある芸術家」が本書を手にして、融合の流れに一層の加速が起ることを期待したい。

